

**第496回 2月22日開催
出席委員（50音順・敬称略）**

伊藤 芳明 大村 英昭
木下 明美 櫻井 美幸
荒巻 裕(書面参加)
倉光 弘己(書面参加)
黒田 勇(書面参加)

◆ テレビ番組

「JNN報道スペシャル阪神大震災から10年

今そこにある危機」

1月16日（日） 14時00分～15時54分放送

毎日放送の第496回番組審議会は2月22日大阪市北区の本社で開かれ、1月16日に放送したテレビ番組「JNN報道スペシャル阪神大震災から10年 今そこにある危機」を審議した。この番組は、10年前に被災地となった阪神淡路の地域からあのとき得られた教訓と知恵を発信。次なる大地震の被害が想定される東海など各地域の取り組みを報告、果たして予知は可能なのか、課題は何か、日本列島に横たわる「今そこにある危機」を検証する。

委員の主な意見

- * テレビならではCGやバーチャルの技法を使った映像は迫力、説得力があった。迫力のある作りになっているだけにコメントはセンセーショナルな部分は抑えてほしかった。例えば、「首都壊滅という最悪のシナリオとなる」等。
- * 首都直下型地震の危険性を指摘しても東京発展はとどまるところを知らない。危険度の指摘だけではなく、危険性の指摘と人々の目の前にある利益、視聴者がどう動くのか、等を考えていく番組が必要ではないか。
- * すごい迫力でインパクトも十分、学者が適所に出てきて説得力があった。予知が難しく、被害を減らす「減災」が大切とよくわかったが、何をすべきかについてはヒントだけでなく、具体的に踏み込んだものが欲しかった。問題点を検証し、国民全体の防災意識を高めてほしい。

- * 今、テレビが使えるものすべてを使ってやってみせるといったスタッフの意気込みが感じられた。ナレーターが4人出てきたが、あれだけいろんな声の人を使う意味がわからない。
- * 科学的な地震予知へのアプローチが多彩な科学者の意見をふまえながら検証されていた。毎日放送の10年にわたる映像蓄積があつてのことであり、阪神・淡路大震災の経験をアジアをはじめとする世界の人々と共有し、共通の課題として事前予知や防災に役立ててほしい。
- * 地震予知をめぐる政策の変遷、巨大地震のメカニズム、巨大火災などの整理は良く出来ていた。津波は地下街や地下鉄に流れ込む事態が懸念されるが、こうした巨大津波に関する情報は少なく、この点は物足らなかった。
- * 今回のスマトラ沖地震によって地震防災が地球規模の課題であることが改めて確認された。同じ地震国のイタリアでも、こうした番組が何回か放送されているが、やはりデータの緻密さや具体性ははるかに日本の方が優れている。こうした番組なり素材が地震国を中心に世界に輸出されればと思う。日本のメディア、とりわけ在阪局のこの面での国際的競争力は大きい。